セルバンテス

ドン・キホーテ

EL INGENIOSO CAVALLERO DON QUIJOTE DE LA MANCHA

会田由訳

第4巻

晶文社

著者について

セルバンテス

一五四七年、スペインの貧しい外科医の家に生まれる。青年時代から演劇に興味をもち、ソネットや四行詩を書く。二二歳のときイタリアに渡り、ルネサンス末期のイタリア文化にふれる。七一年、スペイン歩兵隊の兵士としてトルコとの「レパントの海戦」に参加。左手を負傷し、生涯自由を失う。帰国途上海賊船に襲われ、アルジェリアで五年間の捕虜生活を送る。八五年に処女小説『ラ・ガラテーア』を出版。その後「無敵艦隊」の食糧調達人などの職についてしばらく創作を断念する。一六〇五年、五八歳のときに畢生の傑作『ドン・キホーテ前篇』を刊行、驚異的な成功を収める。十年後『後篇』刊。世界文学史上に輝く永遠の名作として読みつがれることになる。一六一六年没。

訳者について

会田由（あいだ・ゆう）

一九〇三年熊本県生まれ。東京外国語大学スペイン語科卒業。一九七一年没。

訳書―セルバンテス『サラマンカの洞穴』『模範小説集』、モラティン『娘たちのはい』、アラルコン『三角帽子』ほか。

ドン・キホーテ　第4巻

一九八五年六月一〇日発行

著者　セルバンテス

訳者　会田由

発行者　株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二―一―一二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六―六二七九九

堀内印刷・牧製本

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします。

セルバンテス

ドン・キホーテ

EL INGENIOSO CAVALLERO DON QUIJOTE DE LA MANCHA

会田由訳

第4巻

晶文社

ドン・キホーテ

EL INGENIOSO CAVALLERO DON QUIJOTE DE LA MANCHA

会田由訳

第4巻

晶文社

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

Miguel de Cervantes Saavedra

SEGUNDA PARTE DEL INGENIOSO CAVALLERO
DON QUIJOTE DE LA MANCHA

1615

ドン・キホーテ　第4巻　目次

才智あふるる騎士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ　後篇2

第三十六章　ここでは悲嘆の老女、またの名トリファルディ伯爵夫人の不思議な、かつて想像されたこともない冒険と、サンチョ・パンサがその妻テレサ・パンサに書いた手紙のことが述べられる……13

第三十七章　ここでは悲嘆の老女のすばらしい冒険がつづく……22

第三十八章　ここでは悲嘆の老女が、おのれの非運について語ったことが述べられる……26

第三十九章　ここでは、トリファルディ夫人が、そのすばらしくも記憶に価する物語をつづける……37

第四十章　この冒険とこの記憶に価する物語にかかわりのある、いろいろのことについて……42

第四十一章　グラビレーニョの到着と、この長い冒険の結末について……51

第四十二章　サンチョが島の太守として赴任する前に、ドン・キホーテが与えた忠告と、その他よくよく考慮されたことどもについて……69

第四十三章　ドン・キホーテがサンチョ・パンサに与えた第二の忠告について……78

第四十四章　サンチョ・パンサが島の政庁に案内されたありさまと、城中でドン・キホーテに起こった不思議な冒険……89

第四十五章　大サンチョ・パンサが、どういうふうに、おのが島をその手に収め、どういうふうに統治を開始したか……109

第四十六章　恋に悩めるアルティシドーラの恋愛事件の推移のひまに、ドン・キホーテがこうむった鈴と猫のものすごい驚きのこと……121
第四十七章　ここではサンチョ・パンサがその政府でいかに身を処したかがつづく……131
第四十八章　ドン・キホーテと公爵夫人の老女ドニャ・ロドリーゲスにもちあがった出来事、ならびに文字にのこし、永遠の記憶に価するその他のいろいろな出来事について……147
第四十九章　サンチョ・パンサがおのれの島を巡回中に起こった出来事について……163
第五十章　ここでは老女を鞭叩き、ドン・キホーテをつねった魔法使と刑の執行人が何者であったかが明らかにされ、ならびに、サンチョ・パンサの妻テレサ・パンサへ手紙を持って行った小姓に起こった出来事……182
第五十一章　サンチョ・パンサの政治の進展および、なかなかよろしきその他の出来事について……198
第五十二章　ここでは第二の『悲嘆の老女もしくは苦悶の老女』またの名をドニャ・ロドリーゲスと呼ばるる老女の冒険が述べられる……212
第五十三章　サンチョ・パンサ政府の疲労困憊した結末と終局について……223
第五十四章　ここではこの物語に関係のある事柄を扱っていて、他のいかなる物語にも関係はない……234

第五十五章　道中でサンチョに起こった出来事および、その他刮目すべきことどもについて……246
第五十六章　老女ドニャ・ロドリーゲスの娘を擁護せんとドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャと召使トシーロスのあいだに交えられた、すばらしき、かつて見たこともない戦いについて……258
第五十七章　ここではドン・キホーテが、公爵にいとまをつげた次第と、公爵夫人の腰元、怜悧な気儘者のアルティシドーラとのあいだに起こった出来事について述べられる……266
第五十八章　ここでは数々の冒険が、おたがいに踵を接して、ドン・キホーテの上に雨と降りかかった次第を述べている……275
第五十九章　ここではドン・キホーテにふりかかった、冒険とみなしてもよい、不思議な出来事が述べられる……294
第六十章　ドン・キホーテがバルセローナへ向かう途中で起こった出来事について……308
第六十一章　バルセローナに到着したとき、ドン・キホーテに起こった出来事、および気がきいたというよりも、真実味を帯びたその他くさぐさのこと……329
第六十二章　ここでは魔法の首の冒険が述べられ、ならびにごくこまごましたことではあるが、物語らないではすませないことどもが伝えられる……333

第六十三章　ガレーラ船を訪れたとき、サンチョ・パンサの上にふりかかった災難と、美しいモーロ娘の珍しい冒険について……355
第六十四章　ここではこのときまでにドン・キホーテの身にもちあがったすべてのことにもまして、もっとも彼に深い痛手を与えた冒険について述べられる……370
第六十五章　ここでは『銀月の騎士』が何者であったかということが明らかにされ、ならびにドン・グレゴリオの救出と、その他の出来事について……377
第六十六章　これを読む者は眼に見、人に読んでもらって聞く者は耳にするであろう事柄について述べる……386
第六十七章　ドン・キホーテが羊飼いになって約束した一年が過ぎる間、野原で暮らそうと決心したこと、ならびにその他のまことに興味津々としてめでたき出来事……396
第六十八章　ドン・キホーテにふりかかった豚の冒険……404
第六十九章　この偉大なる物語の全過程においてドン・キホーテに起こったもっとも稀有な、もっとも奇異な出来事について……413
第七十章　これは第六十九章にひきつづいて、この物語を明らかにするにははぶくことのできないことどもを述べる……422
第七十一章　ドン・キホーテがサンチョとともに、その村へ帰る道すがら起こったことについて……434

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

第七十二章　いかにして、ドン・キホーテとサンチョが彼らの村に到着したかについて……445
第七十三章　ドン・キホーテが古里の村へ入ろうとするときに出会った凶兆、ならびにこの偉大なる物語を粉飾し、さらに光彩を添えるその他の出来事について……454
第七十四章　ドン・キホーテはどういうふうに病いに落ちたか、および彼が作った遺言と彼の死去について……462
訳注……476
セルバンテス年譜……492
邦語参考文献……502

才智あふるる騎士ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ　後篇2

ブックデザイン　平野甲賀
挿絵　ギュスターブ・ドレ

第三十六章

ここでは悲嘆の老女、またの名トリファルディ伯爵夫人の不思議な、かつて想像されたこともない冒険と、サンチョ・パンサがその妻テレサ・パンサに書いた手紙のことが述べられる。

公爵の邸には、ひどくふざけ好きの、才気走った一人の執事がいたが、この男がメルリンの役を演じ、今度の冒険の筋書を一手にひきうけ、例の詩も自分でつくり、一人の小姓にドゥルシネーアをやらせたのである。今度もまた、公爵夫妻の助力のもとに、想像も及ばぬような、およそふざけた、珍妙な新しい冒険の趣向を考え出したのであった。

その翌日、公爵夫人はサンチョに、ドゥルシネーア姫の魔法を解除するために、彼がやることになっている苦行のつとめを、はじめたかどうかをたずねた。すると、へい、はじめました、昨夜は五つ鞭打ったでがすと答えた。そこで公爵夫人が、何で叩いたかとたずねると、手で打ったでがすという返事であった。

「それは、鞭打ちじゃなくって、てのひらでそっと叩くようなものですわ」と、公爵夫人が答えた。「そんな生まやさしいことじゃ、賢人メルリンは満足なさいませんよ。だから、ねえサンチョどん、

束ね綱の鞭打ちか、痛さのこたえるような先に結び目をつけた太綱で鞭打ちしなければなりませんわ。文字は血を流して覚えるって言うじゃありませんか。それにドゥルシネーアさまのような、あれだけのご身分の高いお姫さまですもの、そんな安っぽい、そんな安いお値段じゃ、自由にしてもらえませんよ。よござんすか、サンチョ、なまぬるい、いい加減にやる慈悲の行ないは、何の役にも立たないし、利き目もないってことを考えることよ」

「お前さまが何か鞭か、それとも手頃な綱をわしにくだせえ、そしたら、それであんまり痛くねえように、やっつけるだから。なぜっていや、わしゃ田舎っぺいでがすが、わしのからだはスパルト草より、綿に近えってことを、お前さまに知ってもらいてえでがす。それに他人のためにわが身を痛めつけるこたあねえでがす」

「それで結構よ」と、公爵夫人が答えた。「明日、あんたにちょうど手頃な、あんたの柔らかいからだに、瓜二つみたいに、ぴったりした鞭をあげますわ」

それに対して、サンチョが言った。

「わしが心からお慕いしてる奥方さま、いいかね、わしゃ女房のテレサ・パンサに手紙を書いて、あいつと別れてこの方わしに起こったことを残らず書いてあるでがす。その手紙は、今わしの懐に入れているだが、上書きすりゃもうそれでいいでがす。そこで、お前さまにこいつをひとつ読んでもらいてえだが、というのは、わしの考えじゃ、太守らしいふうに、つまりわしの言うのは、太守方が書くにちがいねえように書けてると思うからでがす」

「で、誰がつくったの？」と、公爵夫人がたずねた。

「わしでなくて誰がつくるもんでがすかね、いくらわしが能なしでも！」と、サンチョが答えた。
「で、あんたがそれをお書きになったの？」と、公爵夫人が言った。
「思いも及ばねえでがす」と、サンチョが答えた。「わしは自分の名前だけを書けるだが、読めも書きもできねえだからね」
「さあ見せてごらんなさい」と、公爵夫人が言った。「きっと、その手紙の中でも、あんたの知恵の働くところを、そっくり、存分に出しておいででしょうね」
サンチョが懐から、開いたままの手紙を取り出すと、公爵夫人はそれを受け取って、次のように書いてあるのを読んだ。

女房テレサ・パンサ宛のサンチョ・パンサの手紙

さて、したたかに鞭を食らったれば、小生は騎士らしゅう馬に乗って行き候らわん。* もし立派な太守職が手に入ったれば、したたかの鞭打ちの代償を払ったからに候。お前さまはこのことはわからぬかと思うだが、いずれおわかりになり候べし。テレサ殿、小生はお前さまが馬車に乗って出歩きするよう決めたことを、これに気をつけることを、きつく申しおき候。というのは他のいかなる出歩き方も、四つん這いに歩くと同じで候えばなり。お前さまは太守の妻女だで、とやかく人にかげ口を言われんよう気をつけられたく候。ここに緑色の狩り服をお前さまへ送り申し候、これは公爵夫人さまから拝領の品で、これを仕立て直して娘の下袴と胴着にされたく存じ候。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c